
碧ちゃんの家庭教師

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧ちゃんの家庭教師

【ZPDF】

N1809D

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

入学式の日一つだけ席が空いていた。その時をほど京介は気にしていなかつたが、一ヶ月たつてもその席はあいたままだつた・・・

不登校のお嬢様

「それでは、自己紹介してもう一つ。一番から
「新井京介です。1年間よろしく」

俺の名前は新井京介。陽城学園に通うたぶん普通の高校1年生。京介はいま入学式で自己紹介していた。どんどん自己紹介が行われていく。

「本田碧さんは休みだつたわね」

「中学からの人たちも高校からの人たちもみんな仲良くな」

一ヶ月たつても1つ空席があつた。それは・・・

「本田碧さん、本田さん? 今日も休みつと」

そして休み時間

京介は周りの人と仲良くなつていた

「なあ本田碧つてどんなやつなんだ?」

「京介、気になるのか?」

「そつか京介は入つてきたばかりだもんな」

「本田さんはずっと不登校なんだ。中2ぐらいまでは来てたんだけど。ある日突然こなくなつたんだ。うわさではいじめられてたつてなつてるけど、実際の理由はわかんないんだ」

「けつこうかわいかつたんだぜ? 学校でも1位、2位を争うぐらい」
「それから本田さんを受け持つ担任の先生が家に行つてるんだけど、全然ダメ。会つてもすぐ暴れるらしくて」

「そつか・・・」

(なにがあつたんだるう?)

「なんで不登校なのに進級できんだ?」

「あゝそれは理事長の孫だから特別措置が取られてるんだよ

「確かに卒業式では名前だけ呼ばれてたような」

「いいなーおれも理事長の孫に生まれたかったよ

とグチをこぼす京介の友達凍也であつた。

「お嬢様？昼食ができました。」

「ありがとうございました、そこに置いて」と

「かしこまりました。」

「お嬢様？今日は天気もいいですし外に出てみては？」

「遠慮しどくわ、窓を開ければ風も入るし、陽の光の入るから大丈夫」

「さようでござりますか？それなりにいわゆつくり

と部屋を後にするお手伝い。

「どうだった？」

「ダメだった」

、「またか・・・」

「どうしたのかね？あれからずつと引きこもつてやつて」

「それがさこの間聞いたんだけど」

「あなたたちなにやつてるんですか！――早く仕事に戻りなさい」

「はい」

「お嬢様・・・」

そして放課後

「京介、一緒に帰ろうぜ？」

「いいぜ」

「でよ？・・・だつたんだぜ！――」

「ハハハなんだよそれ？」

「じゃあここでな」

「ああじゃあな」

と京介は凍也たちと分かれた

「やべ～ドラマの再放送が始まる！――仕方ない近道だ」

と京介はとある家に入った。それは京介にとっては当たり前の「」と
だった。

(「の家でかいけど一体誰が住んでんだりつ～。)

と思いつく前進で進んでいると

(女人だ。)

「あつアマメが戻ってる!!!!」

あーアヤメが咲いてる！！

やひせり花壇に水をやつてこむやひだつた。

門がみえてきた。

と思った矢先、京介はその女の人に見つかった。

卷之三

と並の悲鳴とともに動を出した

すねとサトレンか鳴り響き、とにかく隠れていたのか？

一帯は黒いぐぬの男たちが逛つてきたり

と思ったのだが進行方向はふさがっていた。

(とにかく逃げよう)

「あつちへ行つたぞーーー！」

とある家の敷地内を走り回るハメになつた京介であつた

(۱۷۱) النحو

卷之三

三〇「アラモード」、被へてヒナ。

(はるか昔から) の嫁がへつてゐる。・・・ もうおふくろが嫁が懲り

んだし・・・とにかく事情を話して謝らないと)

と思ひ家の中に逃げ込んだ

「中に逃げ込んだぞ！！！」

（正） なんとかあい、 三毛からは逃げられぬ

「よくここまで逃げられましたね？ですが、ここまでです！どうせ

お嬢さまを物色してたんでしょう？許しません！！！」

とこの家で働いている執事と思われる人がゴルフクラブを持ってやつてきた

「ちょっと待ってください、誤解です」

「どんな言い訳しても同じです！！！」

とゴルフクラブを振り回してきた。それをなんとか突破し、正面の階段を上った。

どうやら聞く耳を持たない様子。

「たぐつなんでこうなんだよ？」

と追われる京介。

「逃がしませんよ～～！」

「こちらは執事中村、いまターゲットは私を突破し階段を上つていきました。なんとしてでもあの部屋にだけは入れないようにお願いします」

「了解」

「了解」

と連絡を取り合つ中村

その頃京介は2階の廊下にいた

「はあ～何してんだろう俺・・・」

「どこいった！！！」

（ヤバイ！！）

と人の声が迫つてきた。

京介はとっさにとある部屋に入った

「どこいった？」

「なんとしても見つけるんだぞ」

「ふう～なんとかしばらくは安全だ」

としばらく停戦と思つた京介であつたが

後ろの気配を感じ振り向くと年は京介と変わらないくらいの一人の女の子がいた

「すいません、隠れさせていただいてます」

アーティストの女の方は去れて、一寸金く動かなかつた。

京介は目を凝らし、女の子に近づいた。

「」ないで・・・いや・・・」

と絞り出すような声で言いつと女の子は倒れた

そして2時間後女の方は気がついた

「気がついたか？」

- 5 -

女の子は目が覚めたばかりでまだぼやけていた。視界がはつきりしていく

と物を設ざてきに

「ちょっと落ち着けって、なあ？」

ニシキヤ

גָּדְעָן

と近づく京介。

道者坐かしててり。かでし。

ヒロセノシテ

「 て い う か あ な た は う ち に 何 の よ う よ ？」

と怒り、かの三日月がわがのてりの緑縁を語りた。

「バレてた？」

「たゞ、…・・・」

(なんでだらう? 私、ちゃんと会話ができる。)

「とりあえず脱出法を考えないと」

「自分で考えなさいよ？私関係ないんだから」「そうだけどさ、家の構造がわからないから君にも手を貸して欲しいんだけど」

「仕方ないわね、やる」とはこれと黙りてないから考えてあげるわよ」

「「」から一番近い出口はあそこだけどおそらく大きなとこは警備強化してあるから」

「薄いところは・・・裏門だ！！！一番人通りが少ないから、ここと通れば早くつくよ」

「それだ！！ありがとう」

「なに喜んでんのよ、まだ脱出してないでしょ？」

「そうだな。」

そして作戦実行し見事に成功

「もう2度と来るんじゃないわよ？」

「それはどうかな？」

「まつたくもう・・・」

「そういや名前聞いてなかつたな。俺、新井京介。君は？」

「本田碧よ」

（この人が本田碧？見た感じイジメられるにつづり、イジメそんなイメージなんだけど）

と思いつながら見ると

「なにじろじろ見てんのよーー..」

「いやなんでもない」

（俺、ずっと学校で待ってるからな）

と思いつつ本田邸を後にする京介であった。

筋肉痛と会話

翌日

「京智……早く起きないと遅刻するよ」

と母親に起こしに来るが京介は反応なし。なので

「起きる……！……バカ京介……！」

「うわ～！～」

と3つ上の姉の美咲に耳元で起こされる。それがいつもの新井家の朝である。

「重い……」

「さつさ起きる。」

「わかつた。わかつたから降りて」

「うつ……」

（全身痛い……筋肉痛か？昨日あんだけ逃げまわったもんない）

そう思いベッドから降りた。

京介は運動不足がたたつたのか全身筋肉痛になっていた。

「姉ちやん今日速いじやん」

「うん、今日講義1時間目だからよ」

美咲は有名大学の慶應大学の1年である。

高校までは真面目一筋だった美咲であつたが、なにがあつたのか大学に入るととたんにはじけてしまったのだ。そのせいか起こし方も高校までは母親と同じような感じだったのが今に至る……

「京介？似合う？」

と美咲が執拗に聞いてくる

「う・・うん似合つてるよ」

「ほんと～？やつたー！～」

と嬉しそうにはしゃぐ美咲を

（たくつ弟に言われてこんなに喜ぶなんて・・・彼氏でもできないものなのかね～？姉ちゃんだつたら寄つてくる男いそつなのにな・・・・やしたらこれも収まるんだろ？けど・・・）

と思ひ京介であつた。

美咲は眞面目一筋であつてもほじけても「ハハコンだけは変わらなかつた。

そして朝食を取つて学校に向かつた。

「いってきま～す」

教室に着くと

「おはよう

と凍也が後ろから背中をたたいてきた。

「いてつやめろよーー！」

「「めん」「めん」

と凍也は謝つた

その時京介は碧の机を見た。

「昨日は、ありがとな

「ん？」

「いや、なんでもない

「そつか

授業は進み、4時間目は体育の授業になつた

（イタタタ、イタタタ）

凍也たちは京介の様子がおかしいことに気づいた

「なんだ？あいつ

昼休みになり、昼食を取つていた

「京介、今日の体育おかしかつたぞ

「てか、今日の京介おかしいぞ」

「いや、すごい筋肉痛で」

「なんで？」

（本田碧の家を逃げ回つたつていえないよ・・・）

「いや、昨日家の手伝いしてたらね」

「筋肉痛か・・・俺も運動してねえな最近」

と凍也がぼやく。

「だから俺さ、部活入ろうと思つたんだけど5月だし、入りづら一
んだよな」

「お前、中学でなんか部活してたのか?」

と聞く京介の友達、英樹。

「まあ野球部で補欠だつたけど、お前らはなんかしてたのか?」

「俺は水泳部で今もやつてるよ」

「凍也是?」

「俺は卓球部だつた。レギュラーだつたぜ。」

「そうそう、いつ中学のとき関東大会準優勝したんだよ」

「へへおまえがね・・・」

「でも卓球部つてなんか根暗が多くてぜんぜん活気なもん」

放課後京介は帰つていった。

「あ~今日、疲れたわ・・・また近道しよう」

（でも昨日あんなことあつたし・・・まあいいや）

と京介は本田邸に入つていった。

「あんたまた!!」

「うわ~いつの間に。」

と驚く京介

「ウチに入ろうとするあんたが見えたのよ。たく憲りないわね」

「いつたろう?ここ通つたほうが近道だつて。でも昨日あんなこと
があつたからどう突破しよつかなつて思つてて

「しようがないわね。ほら行くわよ」

「え?」

「また昨日みたいになつてもらつたら迷惑なの!!」

と京介は碧と本田邸に入つていった。

「イタタタ、イタタタ」

「どうしたの?」

「いや昨日逃げ回つただろ？だから筋肉痛で」

「だらしないわね。運動不足なんて」

「ずっと自分の部屋の中に閉じこもつてゐやつに言われたくないね」

「新井君？」

「あのわ、京介でいいよ。苗字で呼ばれるのあんまり好きじやないんで」

「なら京介？」

「なんだ？」

「陽城学園だよね、その制服」

「ああそうだけど」

「私もね同じ学校なんだ」

「やつぱりな」

「1年4組37番本田碧だろ？」

「なんでそんなことまで。もしかしてストーカー？」

「なんでそうなんだよ！…違うに決まつてんだる！…」

と必死に否定する京介

「バーカ。なに必死になつてんのよ。冗談よ、冗談」と笑つた。

（なんだろう？）の安心感。）

「お前の笑顔初めて見た。かわいいな」と京介が言つた。すると

「何言つてんのよ！…！」

と碧は顔が赤くなつた。

「そういうや、なんでそこまで知つてんの？」

「ただのクラスメートだから」

「そうだったんだ」

「じゃあここで」

と京介は本田邸の正門に出た

「お嬢様・・・」

そして京介が「やつて帰る日」が数日続いたある日

「・・・でよ・・・」

「まじで?」

と凍也たちと帰つていると田の前にリムジンがやつてきた

「なんだ?」

そしてドアを開けて出てきたのはタキシードを白髪の高い男だつた。

「新井京介とおっしゃられる方は?」

「俺ですけど、なにか?」

「とにかくお乗りください」

「は~」

京介はリムジンに乗つた。

「おい! あいつやばくねー?」

「何話てんのかな?」

と怪しむ二人

「すいません、いきなり。私本田様の家で執事をしております、中村と申します。以後お見知りおきをわたくし」

と中村は名刺を京介に渡した。

「は~・・・で執事の人が俺に何のよつですか?」

「お嬢様のことなんですが

「お嬢様? あ! 碧のこと?」

「ええ。最近お嬢様。少し変わつたよつに見受けられます。」

「少し変わつた?」

「はい。この間まではずっと部屋に閉じこもつて出でへる」とがなく、食事もいつもドアの前に置いていたのが、食事時になると出でくるよつになりました。ある時間になると庭にでるんです。しかも楽しそうに。あんなお嬢様久しぶりに見ました。いままでは何を言つても出でこなかつたのに・・・」

「そなんですか?」

「すいません、あの引きこもりになつた原因つてわかります?」

「いえ、私たちにもわかりません。こんなのは初めてで」「そうですか・・・原因がわかれればなんか解決策が見出せると思つたんですけど」

「ありがとうございます。やさしいんですね。お嬢様のことをそんなに」

「いえいえ、ただクラスメートとして心配なだけですよ。」

「それで一つお願いがあるんですけど」

「なんですか?」

「あの~お嬢様の専属の家庭教師になつていただけないでしちゃうか?」

「はい~?」

「それで一つお願ひがあるんですけど」「なんですか？」

「あの～お嬢様の専属の家庭教師になつていただけないでしょうか？」

「はい～？なにいつてるんですかいきなり！！それに勉強なんてそんなに・・・」

「確かに勉強を教えてもらいますけど、成績のことはとやかくいうことはいたしません。ただ・・・」

「ただ？」

「ただ・・・あなたにお嬢様のお話し相手になつてほしいのです。その方が学校、いや外の世界に出来られるかもしません」

「外の世界？」

「はい。実は引きこもつてからと云つもの屋敷の外にでてないんです。」

「そうなんですか」

「報酬はいくらでも払います。お嬢様をお救いください」

「そんなこと言われても・・・」

と戸惑う京介に

「お願いします！！あなたしかいないのです・・・」

と中村は京介に泣きついた

「わかりました、わかりましたから離れてください」

「引き受けてくれるんですね？」

「ええ・・・まあ・・・」

「ありがとうござります、ありがとうござります」

とどこかの選挙の立候補者みたいに京介の手を握り喜ぶ中村であった

「はい、はい。」

とこつわけで京介は碧の家庭教師を受けたのである。

そして家で夕食を食べていた

「ねえ～お姉ちゃん勉強教えてよ」

「いいわよ。京介の言うことなら何でも聞いてあげる」と美咲は京介の顔をすりすりした

「ちょっと姉ちゃん！……離れてよー！」「ん」と京介は美咲を離した。

「どうしたんだ？ いきなり勉強つて」

「いやあの家庭教師することになっちゃつて」

「え？ 誰の？」

「それはちょっと……」

「言えないんだ？」

「うん」

「まあいいや。ちゃんと教えるのよ？」

「わかつたよ」

「教えるのは、女の子か？」

「まあ・・・・そうだけど」

「うそ～！～」

「ホント！～？」

「一つ言つておくが、恋愛関係に発展しても俺はかまわん。1人の人間としても学ぶところはたくさんあるからだ。しかしぐれぐれも高校生らしに付き合いでな、高校生らしい」と京介の父がいった。

「なんでそんな話になるんだよ？」

翌日

「おい！ 昨日の怪しい人誰だったんだよ？」

と凍也が聞いてきた

「ちょっとね」

「心配だったんだよ？ いきなり車に乗るんだもん。警察にも言おう

かともおもつたんだか

ら

「やうなのか」

そして放課後

「なあ？ 今からカラオケいかねー？」

「いいね」

と凍也の誘いにのる英樹

「ごめん、俺無理だわ」

「なんで？」

「用事あるんだ」

「そつか

「また、今度な

「ああ」

（カテキヨーツツたらなんていわれるんだろう…）

そう思いつつ京介は本田邸に向かつた

「は～？ 家庭教師？」

「ええ。学校に行かなくなつてから勉強してないでしょ？」

「だからって勝手に決めないでよ！ 私はイヤよ」

「しかし、最低限の教養は必要かと。」

「余計なお世話よ！ …！」

ピーンポーン

「あの新井ですけど」

「はい。お待ちしておりました。中村さん？」

「どうやらきたようです。いいですね？ くれぐれも粗相のないよう

に

と碧から去る中村。そんな後姿に

「私は絶対勉強なんかしないからね

と叫んで碧は部屋に戻つていった。

京介は中に通されて、碧の部屋に案内された

「い」です

「どうも」

「いまのメイドさんかわいかつたな」

「誰が、かわいかつたって？」

「さつきのメイドさん」

「ああ美奈紀さんね」

「美奈紀さんか・・・」

「たぶんこの屋敷で一番かわいいと思つ・・・つて京介！..なんで

ここにいるの」

「だつて中村さんに頼まれて。てか気づくの遅いし・・・」

「もしかしてあなたが私の家庭教師？」

「そうだけど」

「冗談じゃない！..なんで同じ年の人に教えられないといけないの

よ！..しかも私よりバカそうだし・・・」

「悪かつたね」バカそうで

「まあいいや。とりあえず部屋にはいるわよ

「あ！..はい」

と京介と碧は部屋に入った。

「何飲む？紅茶でいいね」

と間髪入れずに碧が言った

「はや！..俺何もいつてないよ？」

「私が紅茶つていつたら紅茶なの」

「なら、最初から聞くなよ」

と不満げな京介。

「じゃ、始めようか？」

「勉強なんかしないからね。しかもなんで私よりバカそう人に教え
てもらわないといけないのよ」

と延々と不満を口にする碧に対し

「さつそくだけテストするから。碧のレベルを知るために」

「ちょっと話聞いてるの？」

「はい」

と淡々とテスト用紙を渡す京介

「時間は50分、それからこれ中学レベルだから。」

「つるさいわね！－やんないって言つてるでしょ？」

「へ～？逃げるんだ～。確かに高校生が中学の問題が解けないなんて恥ずかしいもんね」

「高校生がね～」

と連呼すると

「わかつたわよ！－やればいいんでしょ？」

と碧はムキになつた。

「分かればよろしい。じぱらく何日かはテストだけだから。はい始め」

最初のテストは国語にした京介。

50分後

「あ～終わつた。楽勝、楽勝！－こんなのは簡単よ」

と碧は余裕の表情でテストを京介に渡した

「そうか、さつそく採点するね

」といふと京介は採点しだした。

国語

縛る

サボる 答えしばる

（全然違うじゃねえかよ。サボるつて略語だし。しかももともと日本語じゃないし・・・）

意味を答え、短文を書きなさい。

二の舞

意味 踊りの型 答え 意味：人の失敗を繰り返すこと

二の舞の次は三の舞だ あの人の一の舞は踏みません。

（踊りの型つて・・・どんな踊りなんだよ）

与謝野晶子は詩集・みだれ髪や 物語の現代語訳で知られている

牧場 答え源氏

（牧場つてゲームだろ！…）

小説、吾輩は猫であるや坊ちゃんなどで知られる有名な作家は？

広島東洋カープの4番の人 答え夏目漱石

（誰だよ！…）

社会（地理）

アメリカの首都は？

コートジボアール 答えワシントンD.C

（国の名前だし！…）

鹿児島県や富崎県などで火山灰でできた土地の名前は？

シンドラ 答えシラス台地

（日本じゃないから！…）

社会（歴史）

1192年に誰が何を開いた？

私の姉が股を開いた 答え源頼朝が鎌倉幕府を開いた

（なんだよ！下ネタじゃね～か！…）

壇ノ浦の戦いで源氏が滅ぼしたのは？

鬼 答え平家

（桃太郎か！…）

理科

植物が光合成を行うとき を使い一酸化炭素と水を取り入れる。

染色体 答え葉緑体

（遺伝子・…・）

と京介は必死に笑いをこらえながら採点していた。そんな日が5日続いた。

そして採点し終えた京介

「どうだつた？満点だつたでしょ？私がホンキだせばこんなもんよ
「へ～これがホンキ？つうか俺をバカにしてんのか！…」

と全ての答案用紙を見せる。

「私が、こんな点数なわけないでしょ？採点ミスよ。わかつた！これは私をバカというレッテル貼るための陰謀じゃないの？いや、そ

うに決まってる！――

と剣幕でまくしたてる

「とりあえず落ち着けって。なんでそつ思い込みがはげしいのかな

?お前は」

と京介は一つため息をしてまた口を開いた

「これがお前の今の実力だよ。まあ、学校行つてないから仕方ない
んだけど。」

「どうこいつ意味よ！――？」

と氣が氣じやない碧をなだめるよつこ

「まあ、あれだ。これから少しずつやればいい。少しずつ」

（やうだ、少しずつ・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1809d/>

碧ちゃんの家庭教師

2010年10月10日03時32分発行